

保育者養成校における創造的な音楽表現力の 育みに関する一考察

—鎌倉女子大学専攻科学生による音楽創作活動を通して—

薩摩林 淑子（初等教育学科・講師）

A Study on How to Cultivate an Ability of Creative Musical Expression at Training schools for preschool teachers

Satsumabayashi, Sumiko

Abstract

The purpose of this study is to investigate how to bring up an ability of creative musical expressions and what guidance of create-music activity on training schools for preschool teachers. I planed the create-music activity “express a story use sounds and music”, and take in the class of Kamakura Women's Junior College. I observed their activities, and analyzed the process and the work.

As a result, students understood the meaning of “creative” musical express, deepened their interests to sounds and tones, their abilities of imagination. So, the activity was significant for bring up their abilities of creative musical expressions. The subjects are appeared that to investigate the method of instruction as to make a rhythm-pattern and rhythm-ensemble, a various way to transposition and arrange.

Keywords : Creative musical expression, Create-music activity, Training schools for preschool teachers

キーワード：創造的な音楽表現、音楽創作活動、保育者養成校

1. 序

保育者（保育士、幼稚園教諭）を目指す者にとって、音楽を「創造的」に表現する能力を身につけることは、子どものさまざまな音楽的表現を受け止め、助長し、子どもの創造性を豊かに育むために必要不可欠なことである。幼稚園教育要領・保育所保育指針の「表現」に関する部分においては、子どもの創造性の育みに関して、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。」⁽¹⁾「様々な体験を通して、豊かな感性を育て、創造性の芽生えを培うこと。」⁽²⁾とい

った目標・ねらいが明記され、また具体的な活動については、「感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりする」⁽³⁾「様々な音、形、色、手ざわり、動きなどに気づき、感動したこと、発見したことなどを創造的に表現する。」「感じたこと、想像したことを、言葉や体、音楽、造形などで自由な方法で、様々な表現を楽しむ」⁽⁴⁾、と明記されている。これらの記述から、子どもに育むべき「創造的」に表現する力を鑑みれば、「想像（イメージ）力を働かせ、気づき、感じ、考えることを基盤とし、そのうえで自らの表現を、音などを介して自

由に創り出し（創造）、それを楽しむこと」と捉えることができよう。近年、保育現場においては、このような子どもの自発的な創造性や、創造的に表現する力を育むことはますます大切に扱われており、保育者には、それを支え高めていく指導力が必要とされる。

しかしながら、保育者を目指す多くの本学学生は、果たして音楽を「創造的」に表現し得ているであろうか。音楽科目の授業において、学生は鍵盤楽器や歌の表現技術を磨くことに精一杯になり、音楽表現を「創造的」に工夫しようとする意識は薄いように見受けられる。さらに、その延長線上にある「音楽創作」活動自体にも、「難しそう」というイメージや苦手意識を持っている学生が多いようである。そのような学生達に音楽を「創造的」に表現することの意味、その楽しさや喜びを感じさせるためには、既成の楽曲の表現技術の向上を目指すのみならず、創造的な表現力を喚起し、磨くことのできる音楽創作活動に取り組ませる必要がある。

さて、現在、保育者養成校における「音楽表現」指導に関する取り組み・実践研究は、非常に多くみられるが、「創造的」な表現力の育みを意図した創作活動の実践研究は比較的少数である。その最近の報告において挙げられている活動としては、ミュージカル（土門2004）、オペレッタ（浅賀2006）、音あそびによる音楽作品創作（仲嶺2006）、手・声・楽器等を使った音楽表現（駒2007）などがあり、いずれの報告においても、これらの創作活動が学生の音楽表現技術の向上、より豊かな表現力の育成において有効であったことが結論づけられている。特に駒（2007）の実践研究では、即興的に音楽を創作する表現活動からできあがった作品を、音楽の諸要素（音色・強弱・速さ・拍）と構造の側面から分析し、その問題点として音楽的な広がり制限された作品となっていることを指摘し、音楽的な表現に広がりをもたせるためには「より多くの創造的な音楽活動を行っていく必要がある」「作品づくりにおいて、教師は学生同士または教師とのディスカッションを通して、学生の音楽活動が豊かになるような支援

をする」等を課題として挙げ、音や音楽を「聴く」ことに意識を高めていくことが重要であると結論付けている⁽⁵⁾。

以上のような実践研究をふまえたうえで、筆者は、保育者を目指す本学学生の「創造的な音楽表現力」を育むことを目的に、音楽創作活動「物語を音楽で表現する」を立案し、授業に取り入れることにした。この活動は、あるひとつの物語を題材に、ナレーション・登場人物のセリフを工夫して朗読（音声表現）しながら、随所随所に楽器や身の回りのものを使って効果音を加えるなど、「音」「音楽」で物語を表現し、最終的には録音してひとつの音楽作品にまとめあげるものである。この活動では、心の中に様々な思い（イメージ・想像）をめぐらし、物語の展開に沿う情景・感情・イメージにふさわしい音を探したりつくったりして表現する、音に対する意識を深め、様々な楽器の音色を組み合わせる表現する、簡単なリズム・メロディを創って表現する、といった創造的な音楽表現活動が可能となる。このような活動は、小学校の音楽授業においても創作領域の一内容として取り組まれており、また教員養成系大学の学生を対象とした実践報告（佐野2007、新山王2007）もみられるが、保育者養成校における実践報告は少ない。そこで本稿では、この「物語を音楽で表現する」活動における本学学生の取り組みの実践報告を行い、音楽的要素の学びを捉えながら、必ずしも音楽経験が十分な学生ばかりではない保育者養成校の学生の創造的な音楽表現力の育成にとって、この活動にはどのような成果・意義・課題があるのか、また音楽創作活動においてはどのような指導・助言が有効であるのかについて考察し、保育者養成校における創造的な音楽表現力の育みと、音楽創作指導のあり方を追究することを目的とする。

2. 研究の内容

(1) 研究の対象

鎌倉女子大学専攻科⁽⁶⁾の学生を対象とし、授業科目「音楽表現」（全15回：平成19年4月～7月）に「物語を音楽で表現する」活動（全5回）を取り入

れる。本授業の履修学生6名は、本学短期大学の2年間で音楽を学んできた学生達で、音楽経験としては、入学前の鍵盤楽器経験年数は平均して2～3年と短く、それ以外の音楽経験も浅い。

題材とする物語は、子ども達にもなじみが深くよく知られた日本の昔話から「おむすびころりん」を取り上げ、今回は、歌詞が物語のあらすじを描いている歌「おむすびころりん」（作詞：平井多美子／作曲：石桁冬樹）⁽⁷⁾を軸にした音楽創作活動を立案する。

（2）ねらいと内容

活動「物語を音楽で表現する」では、学生の「創造的な音楽表現力」を育むことを目的とし、次の3点をねらいとして設定する。

- ①「音」「音色」に対する興味・関心を深め、物語の情景や、登場人物の心情のイメージにふさわしい音・音色を工夫して表現する。
- ②物語の内容をふまえ、曲想表現を工夫し、より豊かな表現方法を模索・創造する。
- ③アンサンブル（音色・リズムを合わせる、重ねる）の実践能力を身につける。

活動の大まかな内容は以下の通りである。

〔第1回目〕

物語「おむすびころりん」のオリジナル台本を作る。台本をもとに、効果音をつける箇所や音楽演出の方法を決める。

〔第2回目～第4回目〕

自由な発想で、創造的に音楽を創って表現する。

- ・台本の読み合わせ～人物像をイメージしながらセリフの言い回しを工夫して台本を読み合わせる。
- ・イメージした効果音・音楽演出を創る。
- ・歌「おむすびころりん」のリズム伴奏創り。
- ・作品を録音し、客観的に聴いたうえで、よりイメージに近づけるよう調整する。

〔第5回目〕

本番（録音）→全員で作品を鑑賞し評価を行う。

（3）研究の方法

「物語を音楽で表現する」全5回分の活動を録画・録音により記録し、授業終了後に毎回学生に記入させる「学習ノート」の記述もあわせて、学生の音楽創作の過程を観察・分析する。「学習ノート」の記載項目は、表1のとおりである。最終回には、学生の音楽創作活動の達成感を調査する目的で、「音楽創作に関するアンケート」を行う。さらに初回と最終回に、「音楽創作」という言葉からイメージする事項・活動内容を自由に記述させ、音楽創作に関する学生の意識を調査・分析する。今回は履修学生が少人数であるため、「学習ノート」をはじめとし、学生の生の声・考え・姿をできる限り詳細に捉えて考察する形式の研究方法とする。

表1 「学習ノート」の記載項目

毎回(第1回～第5回)記載する項目
・ 本日のめあて
・ 本日の達成度と次回の課題
・ 教員による指示・指導で参考になった点。または指導を望む点。
・ 本日の感想（自由記述）
最終回(第5回)のみ記載する項目
・ 「音楽創作」を実践した感想。
・ 出来上がった作品を聴いてみての感想。
・ 物語を音楽で表現するために行った工夫。
・ この作品の聴かせどころ。

3. 結果と考察

（1）実践報告～学生の取り組みと音楽的要素への気づき～

全5回の「物語を音楽で表現する」活動は、大きく4つの創作過程において行われた。以下、それぞれの創作過程内における学生の取り組みと、その学び（どのような音楽的要素に気付くことができたのか）に関して、「学習ノート」の記述もあわせて報告する。尚、以降『 』内は「学習ノート」の学生による記述の引用である。

①台本作り・台本の読み合わせ

物語「おむすびころりん」には多くの類話があり、登場人物や物語の展開が少しずつ異なる。そこで、6種類の「おむすびころりん」を全員

で読み比べたうえで、ベースとなる物語をひとつ選択し、それと、歌「おむすびころりん」のあらすじを軸にオリジナル台本を作ることにした。学生は、様々な文章（言葉）を声に出して読む中で、そこに「リズム」が生じていることに気づき、リズムカルな言い回し（「おむすびころりんすっとんとん」「しろいおこめがざあらざら」「きんのこぼんがざくざく」）を多数台本に取り入れることにした。この時点で感じ取っていた言葉のリズムは、メロディ創りにつながる気づきである。

配役（じっさま、ばっさま、欲張りじっさま、ねずみ）を決める場面においては、まず自分達の「声」に注意を傾けた。個々人の個性的な声色を聴きあいながら、それぞれの人物にふさわしい「声質」を配慮して配役を決めた。声のトーン・高低への着目は、さまざまな音声表現・歌唱表現につながる気づきである。

台本の読み合わせに入り、開始当初はセリフ・ナレーションともに抑揚が一切つかず、棒読みの状態であった。学生達はセリフの言い回しが単調になっていることを感じつつも、『なかなか役に入り込めない』状態であった。そこで教員が「まず人物像をイメージしたうえでセリフの言い回しを工夫する」ように助言した。学生はそれぞれの登場人物に関する様々なイメージを「言葉」で表現しながら意見交換を行い

始め、人物像について全員で共通理解を持ち始めた。この過程をふみ、人物のイメージを確立したうえで再度台本の読みあわせを行った結果、学生の「声色」に変化が生じ始めた。具体的には、声のトーン、抑揚に注意が傾けられ、音声表現が変化に富んだ豊かなものになり始めた。セリフに抑揚が付いたことで、言葉の音の高低を意識することとなったが、これもまたメロディ創りにつながる気づきである。

②効果音・音楽演出を創る（表2参照）

効果音創りにあたり、学生達は次のような手順を踏んだ。まず、物語の中で、効果音をつける場面・事物を決め、そのイメージを言葉で表現（擬声語・擬態語）し、それに適合する音を探し、選び、表現した。この際に、学生達は既成の楽器を使用するのみならず、音声や身の回りにあるものも音源として利用した。例えば、夕方・朝の雰囲気表現するにあたり、からす・鶏の鳴き声をイメージし、鳴き声を模倣した声による音声表現を行った。「餅つきの音」では、辞書を床にたたきつける音を探しあてたが、これは「空気を含んだような音を出したい」というイメージを持った上で創った音である。楽器を使用する場合には、奏法により音色が変わることを楽しみ、よりイメージに近い音を模索する姿勢がみられた。例えば、「おむすびが

表2 効果音・音楽演出

効果音・音楽演出をつける場面・事物	イメージした音・言葉(擬声語・擬態語)	効果音・音楽演出の方法	
山の様子	ホーホケキョ(驚の鳴き声)	ソプラノオカリナ演奏	楽器
12時の鐘	カーン	ミニシンバル演奏	楽器
おむすびがコロコロと転がっていく	上から下へ……コロコロ	木琴のグリッサンド(高音から低音へ)	楽器
おむすびが転がり、穴の中へ落ちる	コロコロコロコロ……ストン	木琴のグリッサンド(高音から低音へ)＋単音	楽器
夕方のお寺の鐘	ゴーン ゴーン	トーンチャイム(低音)演奏	楽器
うちでの小槌	キラキラキラ	ウインドチャイム演奏	楽器
うちでの小槌を振る	キラキラキラ シャラシャラシャラ	カバサ・ウインドチャイム演奏	楽器
山の様子	ホーホー(ふくろうの鳴き声)	アルトオカリナ	楽器
おむすびがスムーズに転がっていかない	転がらない→なめらかでない→つかかる	木琴(単音3つ)＋ウッドブロック	楽器
穴に無理やりもぐりこむ	ダン ドスン	ブームワッカー(低音)演奏	楽器
ネズミ達が集団で一斉に逃げる	シャーシャー	レインスティック	楽器
穴の中の真っ暗な様子	暗い音 ホーホー(ふくろうの鳴き声)	アルトオカリナ	楽器
夕方の様子	カーカー(からすの鳴き声)	声	声
朝の雰囲気	コケコッコ(鶏の鳴き声)	声	声
じっさまが山へ出かける(歩く)	てくてくてくてく	足踏みをする	その他
おむすびを包み紙から取り出す	がさがさ	ビニール袋をくしゃくしゃにしてならす	その他
ねずみ達の餅つきの音	ベッタンベッタン 空気を含んだような音	辞書を床に叩きつける	その他
ドアを叩く音	トントン	机を手で叩く	その他
欲張りじっさまが山へ出かける(歩く)	てくてくてくてく	足踏みをする	その他
おむすびを足で蹴飛ばして穴にいれようとする	ガン	机を足で蹴る	その他

コロコロと転がっていく」音は、「上から下へ」というイメージから、木琴のグリッサンド奏法を用い、「おむすびがスムーズに転がっていかない」音は、「なめらかでなくつかかる」というイメージで、同じ木琴を用いて、音程の離れた3音を硬めのマレットで一音ずつ奏するなどの表現上の工夫が見られた。

この創作過程において、学生は、音創り（音による表現）の際には、まず表現するものの「イメージ」を明確に持つことの重要性に気付いた。「イメージ→表現」「表現→聴いて調整→表現」といった音楽表現の重要な一連の流れを意識しながら、効果音創りを行うこととなった。

③歌「おむすびころりん」のリズム伴奏創り (表3参照)

今回軸とした歌「おむすびころりん」は全4番の歌詞を持つ曲であるが、オリジナル台本にあわせて歌詞の言葉を一部変え、新たに5番の歌詞を作って加えた。学生には「歌詞の内容にふさわしい音色を選んで、楽器によるリズム伴奏・アンサンブルを創って表現する」課題を課した。

学生の取り組みでは、まず歌詞の内容を大まかに捉え、「楽しそう、幸せそう、落ち着いた感じ、暗い」等のイメージを形成し、次のような観点をもとにリズム伴奏創りを開始した。

- ・場面の雰囲気・イメージに応じた楽器を選択する

- ・物語が進むごとに（1番→4番）にぎやかな感じになるので、使用する楽器の種類（数）を増やしていく
- ・楽器の奏法やリズムはあえて決めず自由に即興的に入れる

さて、リズム伴奏創りがほぼまとまってきた段階で、一度録音し、自分達の演奏（表現）を客観的に聴く機会を設けた。その結果、『1～5番までのリズム伴奏や曲想に、大きな変化・違いが感じられない』『歌声と楽器とのバランスが悪い（楽器の音が大きく、歌詞が聞き取りづらい）』との点に気付く、音楽的变化、楽器の選択、バランス（音量）について再調整を行うことにした。以下がその際に学生が留意した観点である。

・音楽的变化

歌詞内容に合わせて、歌の速度と強弱を設定する。それをもとに、ピアノ伴奏も変奏させる。

・楽器の選択

明るい音色の楽器・低い音色の楽器と分類し、場面に応じて選択する。

楽器の組み合わせでどのような音が出るのか聴きながら調整する。

・バランス（音量）

歌詞をひきたたせるために、楽器の数と音量を考慮し、歌とのバランスに留意する。

表3 歌「おむすびころりん」（専攻科学生版）の概要

	歌詞	イメージ	リズム伴奏楽器	ピアノ伴奏		
				調性	テンポ・演奏方法	伴奏形
1番	あるとき はたけで おじいさん 弁当広げた そのひょうし おむすび ころりん おむすび ころりん すつとんとん		カスタネット ウッドブロック	ハ長調	Moderato ♩=120	
2番	<u>うたをききたい</u> おじいさん <u>穴の中へととびこんだ</u> おむすび ころりん おむすび ころりん すつとんとん	早く慌てた感じ	鈴 ギロ	ハ長調	Allegro ♩=138 スタッカート多用して、リズムミカルに軽やかに演奏	
3番	楽しく ねずみと おじいさん ごちそう食べたり おどったり おむすび ころりん おむすび ころりん すつとんとん	楽しくにぎやかな感じ	タン布林 ミニシンバル ウッドブロック	ハ長調	Allegretto ♩=126 全体的に f (フォルテ) で演奏	
4番	しあわせいっぱい おじいさん おみやげ りょう手にさようなら おむすび ころりん おむすび ころりん すつとんとん	ゆっくりと穏やかな感じ	タン布林 ミニシンバル マラカス ギロ	ハ長調	Andante ♩=104 レガートを多用し、ペダルも用いてやわらかい音色で演奏	
5番	しめしめ よくばり おじいさん むりやりおむすび <u>穴の中</u> おむすび ころりん おむすび ころりん すつとんとん	ちょっと急ぎ足で 暗い感じ	ボンゴ ミニシンバル	ハ短調	Allegro ♩=138 ハ短調に移調 テヌート多用して、重々しいタッチで演奏	

※歌詞の傍線部は、学生が作り変えた部分。

以上のように、再調整の際には、より具体的な音楽的要素に気付くことができ、完成作品においても、1番から5番までの音楽的变化が楽器の音色、歌の速度変化、ピアノ伴奏の変奏によって明確に表現され、バランスも洗練された。しかしながら、リズム伴奏の「リズム」そのものについては洗練されたとは言い難い。今回は「自由に即興的にリズムを打つ」という方向で、あえてリズムパターンを決めなかったということもあり、リズムアンサンブルとしてのまとまりはつかなかった。

リズム伴奏創りの過程における音楽的要素の気付きとしては、効果音創りの過程と同様、まず「イメージ」を明確に持つことの重要性に気付いた。イメージをもとに、どのような音色が必要であるかを考慮し、さらに複数の音色を重ねたときにどのような音色が生ずるのかといった音色の吟味にまで考えが及ぶようになってきた。また、音楽的表現を豊かに表現するためには、音楽的变化が必要不可欠であることに気付き、速度・音量の効果的な変化方法について考えた。しかしながら、ピアノ伴奏の変奏については、学生は「こうしたい」という思いはあるものの具体的な奏法上のアイデアに乏しかったため、学生のイメージをもとに教員がいくつか提示し、それを学生が選択して取り入れる方法をとった。

④「ねずみの歌」のメロディ創り（譜例1）

今回ベースにした物語には、おむすびが転がって入った穴の中で、ねずみ達が歌う歌「このくにおえ、ねこがいなけりゃ、ねずみのごくらく しゅとんとん。百になっても、二百になっても、ニャーゴのこえは、ききたくねえな」⁽⁸⁾が掲載されており、これを台本に取り入れた。そこ

で、この歌にメロディをつける課題を課した。しかし、メロディ創りを始めるにあたり、学生は全くアイデアがわからない状態となった。そこで、教員が日本のわらべうたをいくつか紹介した。わらべうたは、日本の子ども達が遊びの中で口ずさんだ歌が伝承されてきたものである。よってその音組織は2音・3音構成が中心で、シンプルで歌いやすい。数曲のわらべうたを提示し、その音組織を説明した結果、学生はそれを応用し、ねずみの歌の歌詞に音をつけながら即興的に口ずさみ始めた。歌詞の言葉の高低に着目しつつ、2音・3音でいくつかのメロディを創り⁽⁹⁾、最終的に出来上がったのが譜例1である。このメロディの表現方法としては、ねずみ達の可愛らしい雰囲気を出すために、楽譜上の音程から1オクターブ高い音程に上げて歌うこととし、「お祭りのにぎやかな風景、ねずみが楽しく踊っている様子」をイメージして、楽器（でんでん太鼓・オカリナ・クラベス）によるリズム伴奏もつけた。

この創作過程においては、台本作りの過程において気付いた言葉のリズム・音の高低をふまえ、わらべうたの音組織も利用してメロディを創ることとなった。さらには、声のトーンや音程を変化させることで、音楽的表現が豊かになることに気付き、よりイメージにふさわしい音声表現・歌唱表現を模索した。

以上の4つの創作過程をふみながら、音楽作品「おむすびころりん」は完成した。さて、それでは学生達自身は今回の音楽創作においてどのような工夫を行ったと自己評価したのであるか。学習ノートの最終回における記載項目「物語を音楽で

譜例1 「ねずみの歌」

このくにおえ ねこがいなけりゃ ねずみのごくらく しゅとんとん

ひゃくになっても にひゃくになっても ニャーゴのこえは ききたくねえ なー

表現するために行った工夫」の記述を見てみたい。

『楽器だけでなく、その場面に合った音の出るものを採して使用した。』

『まず登場人物の性格を決めて、その役柄に合ったセリフの言い回しを工夫した。』

『録音する時には効率よく効果音を出せるように、マイクと人の距離感を考え、楽器の並べ方も工夫した。』

『歌詞に合わせた楽器の数とメロディの速さを工夫した。』

この4点と、これまでに述べてきた「学生の取り組み・音楽的要素の気づき」をふまえたうえで、今回の学生の音楽的要素の学びを整理すると、以下の4点にまとめられる。

①リズム的要素・・・言葉のリズムをもとにしたセリフの言い回しの工夫

②メロディ的要素・・・言葉の音の高低やリズムをもとにしたメロディ創り

③音楽的变化の付け方

・音量・・・歌詞内容の変化に応じ、音量の変化を楽器でつける

・速度・・・歌う速度を、歌詞内容にあわせて変化させる

・声のトーンによる変化

④音響・・・録音時、楽器や声の配置を考慮する

(2) 音楽創作活動への達成感(表4参照)

学生の音楽創作活動の達成感を調査する目的で第5回目(最終回)に「音楽創作に関するアンケート」を行った。その結果、すべての項目

表4 「音楽創作に関するアンケート」の内容と集計結果

(内容)

以下の項目に関する自らの達成度を、5段階評価で回答して下さい。

達成度(5段階)

⑤十分達成できた ④ほぼ達成できた ③どちらともいえない ②あまり達成できなかった ①全く達成できなかった

1. 物語や物語の情景・感情にふさわしい音・音楽を想像(イメージ)することができた。
2. 「音」「音色」に対して、興味・関心が持てた、または深まった。
3. 楽器の奏法を工夫して演奏・表現することができた。
4. 自ら「音色」を作り出し、工夫して表現することができた。

(アンサンブルについて)

5. 友人の出す音に耳を傾けることができた。
6. 友人の出す音に耳を傾けながら、それにあわせることができた。
7. 満足のいくアンサンブルができた。

(集計結果)

質問項目(キーワード) \ 達成度(5段階)	⑤	④	③	②	①
1 (イメージ)	2名 33%	4名 67%	0 0	0 0	0 0
2 (音・音色への興味・関心)	5名 83%	1名 17%	0 0	0 0	0 0
3 (楽器の奏法の工夫)	6名 100%	0 0	0 0	0 0	0 0
4 (音色の工夫)	3名 50%	3名 50%	0 0	0 0	0 0
5 (アンサンブル・聴取)	2名 33%	4名 67%	0 0	0 0	0 0
6 (アンサンブル・聴取と合わせ)	3名 50%	3名 50%	0 0	0 0	0 0
7 (アンサンブル・満足感)	5名 83%	1名 17%	0 0	0 0	0 0

※質問項目における回答数・・・履修学生6名。

※%は小数点以下第1位を四捨五入

について全員が評価⑤（十分達成できた）または評価④（ほぼ達成できた）と回答し、このことから、学生達自身は十分に達成感を感じ得たと考えられよう。

また、学習ノートの記載項目「音楽創作を实践した感想」の記述（『とても楽しい時間であった』『またやりたいと思った』『協力して皆で仲良く取り組めた』『皆でひとつのものを創り上げ、完成したときの達成感を味わえた』）からは、協力して音楽創作を行うことの楽しさを十分に堪能したことが伺える。

（３）「音楽創作」への意識の変容～初回と最終回のアンケート記述から～

今回、音楽創作活動を取り入れるにあたり、初回と最終回に、「音楽創作」という言葉からイメージする事項・活動内容を自由に記述させた。

まず、初回の記述内容を見てみたい。

『短いメロディを作る』『効果音作り』『身近にあるもので楽器をつくって演奏』『イメージを曲にする』『難しそう』『やったことがない』『よく分からない』『イメージすることは苦手』

以上の記述からは、学生が音楽創作の活動内容についてはほぼ的確に捉えているが、「音楽創作」に対して苦手意識を持っていることが伺え、音楽創作は「楽しいもの」といったポジティブな意識は皆無であった。

次に最終回、つまり音楽創作活動を終えた段階での記述内容を見てみたい。

『音をイメージしながら楽しく創る』『イメージを深めたり、考える力がつく活動』『イメージ力の大切さ』『創作することの意味・楽しさを感じる活動』『自分のイメージや考えを音に出して表現する方法』『文字を音に表す活動』『効果音作りと楽器選び』『自分達で様々な楽器を使い、場面に合った効果音を出しながら物語を創ること』『一から自分達で創作する』『協力しながら自由に活動できる』

以上の記述からは、活動内容についてはよりの確かつ詳細に捉え、さらに、音楽創作は「イメージ力」と深く関わることを理解したことが分かる。イメージ力の大切さに関しては全員が記述していたが、さらにはイメージすることや創作活動が「楽しいもの」であるとポジティブに捉えていた。また、音楽創作は「自分達で考えて行う自主的な活動」と捉え、受身ではなく自発的に取り組むという、音楽創作を行ううえで重要な点を理解していた。このように、今回の活動を通して、音楽創作活動に対する学生の意識は、「苦手がよく分からない、難しそうな活動」から、「イメージを十分に働かせながら、自主的に行う、楽しい活動」へと変容したことが伺える。

（４）考察

今回の「物語を音楽で表現する」活動ではさまざまな音楽的要素の学びが生じたが、学生の創造的な音楽表現力の育みという観点における成果・意義、課題について、今回設定したねらいをふまえながら考察する。

まず、ねらい①「音」「音色」に対する興味・関心を深め、物語の情景や、登場人物の心情のイメージにふさわしい音・音色を工夫して表現する、ねらい②物語の内容をふまえ、曲想表現を工夫し、より豊かな表現方法を模索・創造する、に関して考えてみたい。この点に関連して、学習ノートの記載項目「音楽創作を实践した感想」欄にまず着目する。

『音楽創作を实践することで様々な楽器の可能性に気付くことができた。（鳴らし方ひとつで色々な事物やイメージを表現できる）』『様々な楽器・その音色に触れることができた』『どのような音が合うのかを考え抜いた』『どのような楽器をどのように使用すればよいのかとても悩んだ』『楽器の組み合わせによっていろいろな雰囲気ができ、面白かった』『音の強弱、音を出すタイミングなど、他の楽器とのバランスを聴きながら決めていくことが難しかった』『身近にあるもので音を表現できたことが大きな発見であり面白かった』

以上の記述より、今回の活動を通して、「音」「音色」を「聴く」意識が増したといえよう。特に効果音創りにおいては、身の回りの音の出るものを探して表現したり、楽器については既習の奏法にとどまらず、さまざまな奏法を工夫して音色を創り出していたが、その結果、「音」「音色」に対する興味・関心が深まったことは、大きな成果であったといえよう。また、「イメージ力の養成」についての意義もあげられる。音楽表現の際には、まず「イメージ」が必要である。実技演習においては当然のことではあるが、技術の習得を急ぐあまり抜け落ちてしまう恐れがある。今回の音楽創作過程において、「イメージ→表現」「表現→聴いて調整→表現」といった音楽表現の重要な一連の流れを体験したことで、まず「イメージ」ありき、そこから表現を、という経路が学生の中に確立できたと考えられる。そしてこの能力は、今後、すべての音楽実技演習の際に有効に働くことが期待できる。

ねらい②の「曲想表現の工夫、より豊かな表現方法を模索」については課題も生じた。今回は、表現の工夫として、音量、速度による音楽的变化が中心となったが、その段階で満足してしまう様子が見られた。しかし「より豊かな」ということからすれば、例えば今回教員が提示したように、ピアノ伴奏の伴奏形を曲想に応じて変化させたり、メロディを創りそれを移調させることなどについても、より効果的な一手段として、学生自らが実践できるように導きたい点である。これは、子どもの音楽表現活動（歌唱）を支えるためにも有効な手段となる。ねらい③アンサンブル（音色・リズムを合わせる、重ねる）の実践能力を身につける、に関して生じた課題としては、歌「おむすびころりん」のリズム伴奏創りにおいて、リズムアンサンブルとしての完成度が思ったよりも低かったことである。今回は、自由に即興的にリズムを打つという方針で行い、リズム楽器の音色で歌詞内容の雰囲気を醸し出すことはできたが、リズムアンサンブルとしてのまとまりはつかなかった。音楽創作活動に入る前に、授業内においてリズム楽器による簡単なアンサンブル演習を行っていたのであるが、学生はここでそれを応用することなく、リズム楽器の「音色」に関心が向き、その結

果「リズム」の存在は希薄となってしまった。今回のような即興的なリズム表現も当然意味ある活動ではあるが、それにプラスする形で、リズムパターンを創り、よりまとまりある美しいアンサンブルを表現する能力を習得させることが今後の課題である。

次に、今回の音楽創作活動において、学生は教員からのどのような指導・助言が有効であったと捉えていたかをまとめ、音楽創作活動における指導方法について考察する。

学習ノートの記載項目「教員による指示・指導で参考になった点、または指導を望む点」における学生の記述を整理すると、以下の2つの枠組みに分類できる。

- ①楽器の奏法や、効果音創りの際の楽器選択に関する助言
- ②歌のピアノ伴奏の変奏方法、歌の速度を変化させることの助言、
長調・短調の曲調の違いの説明、メロディ創りにおける助言

①の内容からは、教員が多数の楽器と奏法を熟知し、様々な音の可能性を必要に応じて学生に提示することを求められていることが読み取れる。②の内容は、より専門的な音楽的要素に関する指導・助言である。今回行った音楽創作活動において、例えば身の回りにあるものや楽器を鳴らして効果音を創るといったレベルの活動は、学生の力だけで比較的スムーズに行い得た。しかし、曲想表現の工夫として、曲の移調、ピアノ伴奏の変奏、メロディ創りなどの活動においては、ある程度の専門知識が必要となってくる。教員には、模範演奏を示したり、専門知識を解説し、それを学生自らが応用・実践できるように導く手腕・指導方法の確立が求められる。

4. 結び

今回の音楽創作活動「物語を音楽で表現する」を通して、学生達は音楽を「創造的」に表現することの意味を捉え、その楽しさや喜びを感じることができた。学生の創造的な音楽表現力の育みという点においても、「音」「音色」に対する興味・

関心が深まり「聴く」ことへの意識が増したこと、イメージ力の養成、といった大きな成果があり、全体的に見て、今回の活動は有意義であったと結論づけられる。何よりも学生が、『この活動を保育活動でも使ってみたい』『保育活動に生かしたい』という意識を持てたことは、意義深い。

今回は、保育者を目指す本学専攻科学生の創造的な音楽表現力の育みを目的とし、「物語を音楽で表現する」活動を立案・実践したが、小学校教員を目指す学生に対しても同様の活動を取り入れ、音楽的要素の学びを捉えながら、音楽理論的枠組みに根差した、創造的な音楽表現力を育む創作活動を追究したい。「物語を音楽で表現する」活動自体については、今回生じた課題である、①リズムパターン創りとリズムアンサンブルの実践、②音楽的变化の多様な付け方（移調・変奏方法など）に関し、より効果的な指導方法を追究していくことが今後の課題である。

注・引用文献

- (1) 「幼稚園教育要領」、第2章ねらい及び内容／表現。
- (2) 「保育所保育指針」、第1章 1 保育の原理 (1) 保育の目標 カ。
- (3) 「幼稚園教育要領」、第2章ねらいおよび内容／表現 2 内容 (4)。
- (4) 「保育所保育指針」、第10章 6 歳児の保育の内容 4 内容「表現」(1) (6)。
- (5) 駒久美子 (2007) 「保育者養成における音楽的な自己表現と構造的聴取の重要性—授業における創造的な音楽活動の観察と分析を通して—」『全国大学音楽教育学会研究紀要』第18号、33-41頁。
- (6) 本専攻科は、短期大学部初等教育学科の2年間で学んだ初等教育の知識をさらに深め、社会に役立つハイレベルな幼児教育の専門性を身につけることが目的とされている。授業科目「音楽表現」は、「幼児教育・子育て支援コース」に配置され、初等教育学科で培った音楽表現技術を基礎に、さらなる音楽表現・表現指導のスキルアップを意図した科目として位置づけられる。
- (7) 歌「おむすびころりん」作詞：平井多美子・作曲：石桁冬樹（『小学生のおんがく1』教育芸術社、2005年）、60-61頁。
- (8) 竹崎有斐「おむすびころりん」（『日本の昔話』学習研究社、2004年）、24-25頁。
- (9) この方法は、小学校の音楽授業でのメロディ創作（ふしづくり）においても用いられる方法であるが、学生達は小学校時代に経験していなかった。
- ・浅賀ひろみ (2006) 「保育系短大におけるオペレッタ表現活動の実践報告」日本音楽教育学会第37回大会における報告（『大会プログラム』、48頁）。
- ・佐野仁美 (2007) 「小学校教員養成課程における創造性を高める指導の試み」『全国大学音楽教育学会研究紀要』第18号、82-91頁。
- ・新山王政和 (2007) 「教職専門科目としての「総合演習」の確認と、愛知教育大学教員養成課程音楽専攻における授業実践の報告」『全日本音楽教育研究会大学部会会誌』平成18年度、26-33頁。
- ・土門裕之 (2004) 「幼稚園教諭・保育士養成校における感動体験プログラムが培う「人間力」について」『全日本音楽教育研究会大学部会会誌』平成15年度、24-31頁。
- ・仲嶺まり子 (2006) 「保育者養成における「音あそびによる音楽作品創作」への取り組み」日本音楽教育学会第37回大会における報告（『大会プログラム』、41頁）。

要旨

本研究では、保育者養成校における創造的な音楽表現力の育みと音楽創作指導のあり方を追求することを目的とし、鎌倉女子大学短期大学部専攻科学生を対象に、音楽創作活動「物語を音楽で表現する」を立案・実践した。

その結果、学生は音楽を「創造的」に表現することの意味を捉え、①「音」「音色」に対する興味・関心の深まりと「聴く」意識が増したこと、②イメージ力の養成といった成果があり、この活動が学生の創造的な音楽表現力の育みにおいて有意義であったことが示唆された。課題としては、①リズム創りとリズムアンサンブルの実践、②音楽的变化の多様な付け方（移調・変奏など）に関する効果的な指導方法を追求することが挙げられた。

(2007.10.12 受稿)